

安井眞奈美著（平凡社 2022年）
『狙われた身体 病いと妖怪とジェンダー』

久島桃代*

何よりポップな表紙が目目を引く本である。何を隠そう評者も書店で思わず「ジャケ買い」した一人だ。丸い顔に「センキ」や「ハラノイタミ」といった文字が書かれた人物たちが、同じように顔が薬袋や薬瓶になった憲兵と何やら格闘している。「ハラノイタミ」が憲兵「養神丸」を取り押さえているかと思えば、その憲兵の足元では「センキ」が踏みつけられている。病いや痛みと聞くと重いトーンで語られがちなイメージがあるが、格闘中の病いや痛みにはどこか愛嬌があり、みる者の肩の力がふっと抜けていくようなユーモアがある。

本書は、こうした病いや痛みをはじめ様々なものに「狙われる身体」という視座から、かつての日本人の身体観やそれをどのように図像として表現してきたのかを探る。ここでいう「狙われる」とは、病いのような具体的に身体を襲うものから、特定の身体を描く際につきまとう暴力性が問題となるものまで幅広い。まずは具体的に本書の中身をみていこう。

第一章『『見えない敵』を可視化する』では、近世から近代にかけて病いや痛みがいかにかに可視化されたのかを、本書の表紙にもある売薬の広告や治療風景を描いた風刺画、浮世絵などから分析する。症状や対処法を戯画化めいて可視化するという方法からは、描写の具体性や正確さよりも目にした時のインパクトや分かりやすさが第一とされていたことが分かる。

第二章「狙われる身体」では、妖怪や悪霊に「狙われる」、すなわち憑（と）りつかれる身体をめぐる伝承に着目する。これらの伝承を災因論の視点から捉え返すと、身体感覚の物語として、また妖怪などに狙われないための処方箋や襲われた後の対処法として読み解ける

という。

さて、本書のジェンダー視点が明確になるのが第三章「蛇に狙われる女性」からである。同章では、1930年代にまことしやかに語られた、女性器に蛇が侵入するというショッキングな事件を取り上げる。蛇に狙われる物語が前二章の物語と異なるのは、語る者と語られる者との間に明白なジェンダー非対称性がある点だ。「女性器の粘膜に蛇の鱗が引っかかる」(73頁)といった身体感覚の細かな描写がこの物語のリアリティを支えているが、語る者と語られる者とのジェンダー非対称性を念頭に置くと、こうした描写も一種の暴力性を帯びてくる。フェミニズム的な観点を持った読者は、ここにきて『狙われる身体』という不穏なタイトルの真意に気づくのではないか。

続く第四章「妖怪とジェンダー」は、一転女性が「狙う側」に回る伝承に光を当てる。ここでも浮き彫りとなるのは女性をめぐるジェンダーである。女性ばかりが蛇や妖怪や鬼になり、それを男性の僧が成仏させるというストーリーに、著者は男性を標準とし女性を他者化する社会原理や、女性差別的な仏教思想により女性が力を奪われていく過程を重ねる。またそうした構造において追い詰められる女性の悲しみを物語の中にもみるのである。確かに本章の絵図の女性たちには、老いてなお成仏できず、朽ち果てるほかない姿に哀れさを覚えることはあっても売薬の広告のようなユーモアは感じられない。

第三章、第四章が非対称的なジェンダー関係下での女性のやるせなさを示したとすれば、第五章「性と性器の表現」は、妖怪の性と性器の表現を紹介しつつ二項対立的なセクシャリティやジェンダー関係に包摂されない身体

*名古屋大学 環境学研究科

とはどのようなものかを、読者に想像させてくれる。たとえば両性具有の妖怪「まら」の頭は男性器、顔は女性器という形態は、著者がいのように性差や身体に関する我々の固定観念を取り払う。自由な発想によって生み出された性器の妖怪にも、みる者の笑いを誘うユーモアがある。

第六章「身体の放つ異界のパワー」で狙われるのは妊婦や胎児である。かつての日本では、胎児や胎盤、臍の緒といった命の誕生に関わる部位には不老不死や薬としての効能があると信じられていた。本書がメアリ・ダグラスを引いて述べるように、身体の排泄物が災禍(わざわい)と同時に能力(ちから)の象徴とされてきた地域は少なくないが、日本のようにそれを再び身体に直接取り込むという文化は珍しいのではないか。

第七章「胎児への関心」では錦絵をもとに、幕末から明治時代初期にかけての江戸の視覚文化と西洋の性科学の融合の中で、胎児の成長イメージが作られていったことを明らかにする。終章『「狙われた身体」を守るために』では、今後の展望として、狙われる身体と比較研究や、こうした伝承の背景にある暴力の問題のさらなる検討が掲げられる。

評者の専門は人文地理学であり、ジェンダーや障がいといった身体的特徴が人々の空間の経験にどのような影響を及ぼすのかに関心を持ってきた。そうした立場から本書を読んで第一に考えさせられたのは、病いや痛みといった「見えない敵」の可視化の仕方から伺えるかつての日本人の考え方である。症状の名称を顔に書いて擬人化し、どの薬を服用すれば鎮められるかを描いた売薬の広告のほか、医者の手を負えない難病をパロディ化し

た風刺画は、痛みや病いといった災難を笑いに変えるユーモアを醸し出す。江戸から明治にかけては原因が医学的に特定されていない病いが多かった。そのため原因ではなく対処法を示す絵画表現が登場したわけだが、症状の原因が曖昧だったからこそ患者などの特定の個人に責任が帰せられることなく、痛みや病いを笑い飛ばす発想が生まれたのではないだろうか。

また本書は「狙われる身体」だけでなく、境界の物語としても読めないだろうか。フェミニズム地理学者のRobyn Longhurstは、頻尿、破水、出産といった身体と環境の間の境界をしばしば脅かす妊婦のからだは、差異の体系によって分節化された「空間」や「場所」などの概念の前提を覆しうると述べた(Longhurst 2001)。本書で病いや痛みといった身体感覚のメタファーとして登場する妖怪や悪霊も、人間に憑(と)りついたり果ては人間と完全に融合してしまったりと、身体とそれ以外との境界をたやすく飛び越える。人間と人間ではないもの(異形)との間を自在に行き来する日本の妖怪や悪霊の姿も、環境から分節化される以前の身体のあり方を想起させる。性器の妖怪と同様、二項対立の境界を曖昧にする力が妖怪には備わっているらしい。

最後に、本書は日本における身体観が検証の中心だが、近世ヨーロッパに作られた女性の人体模型や唐代の中国の鍼灸にみる身体観、パラオの集会所に描かれた足を開く女性の壁画など、世界各国の身体観についても豊富な資料とともに紹介してくれる。怨霊、怪異、妖怪を生み出す様々な文化的背景への旅へと誘う魅力的な一冊だ。

参考文献

Longhurst, R., 2001, *Bodies: Exploring fluid boundaries*. Routledge.